

湯川博士の素粒子班

今年度の研究費ゼロ

「長年受けた」と査定 少ない予算を取合い

科学者が米軍から研究資金の援助を受けていた問題は、国会でも大きく取り上げられているが、それも原因のひとつは政府の出す科学研究費が少なすぎたためといえる。ところが、その少ない研究費の配分をめぐって、基礎物理学界が大きな声を出している。京大教授湯川秀樹博士を班長とする素粒子基礎理論総合研究班が、これまで毎年二百万円以上の文部省科学研究費を受けていたのに、四十七年度の研究費は、一人わずか一万円前後。あまりにも少な過ぎる。同班に所属する二百二十九人の研究者に割りよれば、一人わずか千円前後。あまりにも少な過ぎる。研究費は「打ち上げゼロ査定をする」とはまったく非民主的だ。査定に当たった伏見康治名大教授、高橋秀俊東大教授に抗議文を届け、復活を訴えている。



湯川秀樹博士
今年度の文部省科学研究費は総額約四十二億円。その配分について、この班は、文部大臣の諮問機関である学術奨励審議会の科学研究費分科会（伏見康治分科会長）が担当、専門分野ごとに金額の査定

短期で成果だせ

高橋秀俊東大教授の話 総合研究班というものは、短期で成果の出る目的のほっきりした研究のための研究費の運用である。同じ研究班が十年も二十年も継続して研究費を受けるのはよくない。いったん決まったら、復活はできない。

伏見康治名大教授の話 わたしが責任をもつて決めたことだから、復活はありえない。湯川班の朝班は一心同体みたいなのだから、湯川班は朝班の三百万円をいっしょに使えばよい。非民主的だといつのは見解の相違だ。



高橋秀俊東大教授の話



伏見康治名大教授の話

湯川班が長年受けてきた研究費は、同班に所属する二百二十九人の研究者に割りよれば、一人わずか千円前後。あまりにも少な過ぎる。研究費は「打ち上げゼロ査定をする」とはまったく非民主的だ。査定に当たった伏見康治名大教授、高橋秀俊東大教授に抗議文を届け、復活を訴えている。

この班は戦後、全国的な連絡のもとに、理論物理学の組織的な研究を推進するために作られたもので、これまで二十年近く毎年、研究費をもらっていた。

湯川秀樹東大教授の話 理論物理学の研究は長いもので、長く続けたいと望む成果はあがらない。理由もなく突然、研究費をゼロにされたのは心外だ。大勢の人が困ることで、私は責任

この班は戦後、全国的な連絡のもとに、理論物理学の組織的な研究を推進するために作られたもので、これまで二十年近く毎年、研究費をもらっていた。

この班は戦後、全国的な連絡のもとに、理論物理学の組織的な研究を推進するために作られたもので、これまで二十年近く毎年、研究費をもらっていた。

この班は戦後、全国的な連絡のもとに、理論物理学の組織的な研究を推進するために作られたもので、これまで二十年近く毎年、研究費をもらっていた。

この班は戦後、全国的な連絡のもとに、理論物理学の組織的な研究を推進するために作られたもので、これまで二十年近く毎年、研究費をもらっていた。

c073-001-048